

「最近では団体の観光客がバスで訪れるようになりまし。以前はめったになかったことです。そう笑顔を見せるのは、道路周辺のある地域の住民。隣国エルサルバドルから北部ティカル遺跡などの人気観光地へ向かう観光客が途中で立ち寄るようになったという。きっかけは、CATが中心となり、町の見ど

コミュニティマップで町の魅力を整理

具体的には、潜在的な観光資源を有効活用し、地域を発展させるための知識やノウハウを対象地域内17のCATに指導。また、CATが地域住民に対して行う研修の実施・運営を支援しているほか、将来的にCATが自ら効果的な観光開発を進めていけるよう、体制強化や人材育成にも力を入れている。

Aは、3つの県にまたがるこの地域一帯の観光促進を図るため、2007年から「観光自治管理委員会強化プロジェクト」を実施。観光産業にかかわるアクター（企業、NGO、住民など）の連携を促し、各地の観光開発を主導する「観光自治管理委員会（CAT）」の能力向上を目指している。



09年11月には、CATの代表者や住民の代表者が観光開発の先進事例を学ぶJICAの第三国研修が、メキシコで行われた。研修中は、現地でグアテマラのプロモーションも実施した

ころを伝える「コミュニティマップ」を作成したこと。近隣のホテルやレストランなどに置いたり、エルサルバドルでの観光フェアで配布したことなどの成果が少しずつ表れ始めている。

マップは、地域住民がCATのメンバーと共に町を歩いて見つけた新たな観光資源をもとに完成させた。プロジェクトのチーフアドバイザー・平林啓記さんは、「こうした共同作業を通して、地域が一つになって観光促進に取り組み土台を築くことができた」と話す。プロジェクトでは、3県合わせて16のCATで同様のマップが作られた。

一方、CATと職業訓練庁との連携で、観光収入となる民芸品の品質向上や、観光客に対する

「森の国」を意味するグアテマラ。その名の通り、深い緑の森と山に覆われたこの国では、紀元前3世紀から1200年以上にわたり、マヤ文明が隆盛を極めた。現在も、熱帯ジャングルの中にそびえ立つ遺跡が当時の栄華をしのばせる。

そのグアテマラで今、急成長しているのが観光産業。近年、産品別の外貨獲得額で、観光は伝統的輸出産品であるコーヒーや砂糖を抜き第1位となった。マヤの遺跡、スペイン植民地時代に建設されたコロニアル都市、森や湖などの美しい自然が、国内外の人々をひきつけている。

だが一方で、発展はそうした一部の人気観光地によって支えられているのが現状だ。実際には、農村部を中心に数多くの魅力的な観光資源が点在するものの、施設やサービスの不足、交通インフラの未整備などにより、それらが十分に活用されていない。この国では、2人に1人が1日2ドル以下※の生活を送り、特に農村部では7割以上が貧困状態にある。そのため、地域経済を活性化させ、住民の生活向上

るサービス向上のための研修も行われている。民族衣装の生産が盛んなコパン市で、織物などマヤの伝統的な民芸品を売るマリア・マクスさんは、「研修で織物が色落ちしにくくなる技術を学び、より多くの観光客に買ってもらえるようになりました」と喜ぶ。仲間には、研修でミシンの使い方を習得して商品の種類を増やし、成功している者もいる。また、英語や接客マナーなどを習うホテルやレストランの従業員も増えているという。

さらに、JICAは観光庁と協力し、観光地での休憩施設や案内板の整備を進めているほか、一部の道路未舗装区間の舗装を進めるよう、自治体や関係省庁に働きかけている。観光庁のヘレーネ・シュレハフさんも、「この地域の観光産業を活性化させ、いつの日か、魅力ある観光回廊」として発展させていきたい」と話す。

CATを中心に、観光開発という一つの目標に向けて立ち上がったグアテマラの人々。かつて栄えたマヤ文明のように、無限の可能性と魅力にあふれたこの地域が、多くの観光客にぎわう日も、そう遠くはないはずだ。



「食」の面でも観光客をひきつけようと、調理技術や盛り付け、伝統食材を使った料理などについて学ぶセミナーも実施



豊かな生態系に恵まれた自然保護区では、石川晴久・JICA専門家(中央)のアドバイスの下、この一帯に生息する花の種類を観光客に紹介する看板も設置された

※「2006年国立統計院全国生活実態調査」より。

取り残された地域に光を

マヤの遺跡に代表される魅力的な観光資源に支えられ、グアテマラで成長を続ける観光産業。だがその裏では、地域経済の活性化や人々の生活向上につながる観光振興の必要性が高まっている。JICAは、人気観光地の「谷間」となってしまった地域で、観光開発を進めていくための支援を行っている。



世界遺産のコロニアル都市・アンティグアは、石畳とバステルカラーの家々が続く美しい町並みが観光客に人気。背後のアグア火山は、標高3,700メートル以上を誇る

生活向上の手段として

現地に古くから伝わる言葉で、「森の国」を意味するグアテマラ。その名の通り、深い緑の森と山に覆われたこの国では、紀元前3世紀から1200年以上にわたり、マヤ文明が隆盛を極めた。現在も、熱帯ジャングルの中にそびえ立つ遺跡が当時の栄華をしのばせる。

そのグアテマラで今、急成長しているのが観光産業。近年、産品別の外貨獲得額で、観光は伝統的輸出産品であるコーヒーや砂糖を抜き第1位となった。マヤの遺跡、スペイン植民地時代に建設されたコロニアル都市、森や湖などの美しい自然が、国内外の人々をひきつけている。

だが一方で、発展はそうした一部の人気観光地によって支えられているのが現状だ。実際には、農村部を中心に数多くの魅力的な観光資源が点在するものの、施設やサービスの不足、交通インフラの未整備などにより、それらが十分に活用されていない。この国では、2人に1人が1日2ドル以下※の生活を送り、特に農村部では7割以上が貧困状態にある。そのため、地域経済を活性化させ、住民の生活向上

につなげるための手段として、地域の観光開発の必要性がこれまで以上に高まっている。

中南部のコロニアル都市・アンティグアから、最大のマヤ遺跡である北部のティカル遺跡まで約250キロ。この二つの世界遺産を南北に結ぶ道路の周辺地域も、人気観光地の「谷間」の一つ。アンティグアからティカル遺跡への移動には多くの人が飛行機を使い、仮に陸路を通ってもこの地域に立ち寄る観光客は少ない。



トウモロコシの葉を使った人形を売る女性。こうした手作りの民芸品は、農村部の人々にとって貴重な収入源だ